

十か国十校による 国際シンポジウム開催の報告

和田 孫博

『とい』前号に、中学歴史教科書の採択に批判の投書が相次いだという拙文を投稿したが、それがネット上で拡散されたことからマスコミの知るところとなり、結果的に世間を騒がせることとなった。報道を見た『とい』同人や友人各位、さらには本校卒業生からもご心配やご声援をいただいた。深く感謝している。

今の学校教育では、すべての教科・科目において、教員が一方向的に教え込むという方法は否定され、生徒が主体的にみんなと話し合い、議論を通していろいろなことを身につけて行くことが求められている。これがいわゆるアクティブ・ラーニングである。それゆえ、知識を箇条書きに整理し、重要でない周辺情報は削ぎ落とされているような教科書は、高校入試対策には有効かもしれないが、アクティブ・ラーニングの教材としては適していないと思う。その意味では、当該の教科書はどの時代についてもみんな調べたり話し合ったりする材料となる図説や資料がふんだんに載せられていて、高校入試が無い中高一貫校の本校では使いやすいというのが採択の一番の理由であった。決して思想的、政治的な思惑で教科書を採択しているのではないということは、あらためて申し述べておきたい。

話題はガラッと変わるが、近年グローバル教育の重要性が叫ばれ、国もスーパーグローバル・ハイスクールなどを指定し、多額の補助金を出すようになってきている。本校はそのような指定は受けてはいないが、正規の授業においても課外活動においてもグローバルな視点での取り組みに力を入れている。その一環として二〇一〇年から参加している世界十カ国の高校による国際シンポジウムを、この春は本校で開催した。参加者は各校生徒二名と付添教員一名で、同行される校長たちを含めると総勢四十名余りが一週間ホテルをともにし、昼間は本校でレクチャーを聞き、グループ・ワークをし、プレゼンをするという結構大がかりなものであった。その概要について述べたい。

二〇〇九年の春、その前年に英国教育視察に出かけた折に訪問した学校の一つで最古のパブリック・スクールであるウィンチェスター・カレッジの校長先生から「我が校に交流を求めてきた世界中の学校でシンポジウムを開催しようと思うが、貴校も参加しないか」というメールがあった。その提案では、1) 参加国は英国、米国、チェコ、南アフリカ、コロンビア、インド、パキスタン、

シンガポール、中国、そして日本で、各国一校ずつとする、2) 加盟校が持ち回りで毎年春ごろ開催する、3) 開催校までの旅費は自己負担、開催中の宿泊費や食費などの費用は当番校が負担する、4) 高校生の国際的な集まりにふさわしいテーマを当番校が決め、参加者はそのテーマについて予め勉強して集まり、シンポジウムでのプレゼンや議論を通して共通理解を深める、というものであった。英語科の教員、特に付添の任に当たるであろう二人のネイティブ教員と相談した結果、毎年二人ずつなら英語での議論に加わるに足る生徒はいるし、必ずしも母語が英語ではなく宗教的素地も異なる世界各地の同世代の若者と交流する機会を逃すべきではないと、参加を決断した。

初回は二〇一〇年の四月、幹事校のウィンチェスターで行われた。それ以来、アメリカ、シンガポール、南アフリカの順に開催され、五回目のチェコ、プラハでのシンポジウムには私自身も視察に同行した。このときのテーマは「建築」で、生徒たちはそれぞれ自国の特徴的な建築物を紹介するプレゼンを用意してきていた。本校の生徒たちは室町時代の書院造りの広々とした茶室から千利休に代表される侘び寂びの狭い茶室への変遷についてプレゼンした。六日間にわたるプレゼンや議論の間には、プラハの大聖堂やオペラハウスなどの歴史的建造物を巡るエクスカージョンも用意されていた。

その次のパキスタンでの開催は、国情不安により会場を英国ウィンチェスターに変更して何とか繋ぐことができた。その翌年はコロンビアで音楽がテーマで行われた。そして昨年は中国で四月開催の予定であったが、二月になって急に中国政府の方針が理由で中止となった。開催地から近い本校はまだしも、ヨーロッパやアフリカや南北アメリカからの参加国は航空券のキャンセル料金も大きく、憤懣やるかたない様子であった。

そういうことがあった後なので、今年の当番校としてかなりのプレッシャーがあった。例年よりも早く開催日程を決め、テーマは“Society and the Natural World”（社会と自然）とすることを各校に伝えた。そして、このシンポジウムを初回からコーディネートしてきたウィンチェスター校所属の先生が各校と連絡し、参加生徒の決定や、テーマに合わせて四度にわたるレポートの提出を取り仕切ってくれた。

三月二十六日に初日を迎え、主催校として生徒会長の挨拶、グリークラブの合唱で歓迎し、午後から本格的なプログラムが開始された。基調講演は本校卒業生で国連大学の副学長の沖大幹氏による「世界の水環境」について。このシンポジウムの特徴は、講演も聴き放しではない。講演後、その話を受けて一時間半に亘るグループ・ワークを行う。結局この日は午後六時過ぎまで、先進国と途上国の立場で水環境問題について話し合いを続けた。

二日目は、朝から五カ国の生徒がそれぞれ用意してきたプレゼンを披露した。「社会と自然」との関わりは、それぞれの国によって異なる。産業や経済の発

展を重視するあまり自然環境が危機に瀕していることを訴えるプレゼン、地球温暖化に伴う海面上昇の影響を懸念するプレゼン、狭い国土を開発しながら動植物の生態系を人工的に保護しようとする取り組みのプレゼンなど、どれもその国の特徴をよく表していると思った。午後は本校の生物研究部員による住吉川の生態系についてのプレゼンの後、実際に住吉川河畔に下り、鮎などの遡上を可能にする魚道の説明を受けながら、満開の桜の下の遊歩道を散策した。そして菊正宗酒造記念館で六甲山系の伏流水を利用した昔ながらの酒造りについて英語のビデオを鑑賞した。前日の水環境の保全に繋がるミニエクスカージョンとなった。

三日目は観光バスでの京都へのエクスカージョンを用意していた。この日のプログラムは京都の町屋保存に取り組んでいる本校OB生川氏に丸投げしていた。午前中は観光用に保全されている町屋で、町屋の歴史や保存の取り組みについて英語でプレゼンを受け、錦市場や寺町商店街を通り抜けて二条近くの生川氏宅へ。彼の家も町屋で、一階二階の座敷を使って松華堂弁当をいただく。生川氏の心配りはそれにとどまらず、舞妓さんと呼んでくれた。舞の後は質問タイム。自分たちと近い年齢の舞妓さんの普段の生活や稽古の在り方など次々に質問を浴びせる。舞妓さんもてきぱきと答える。私も冷や汗をかきながら必死に通訳した。さらにその後、京都御苑の南西隅にある重要文化財の茶室拾翠亭をお借りして速水流宗匠の呈茶をいただく。満足に正座ができない生徒がほとんどだが、お茶の心は伝わったようだ。元気の残っている人は御所の見学もし、長い間自然との共存に腐心してきた京都人の生活文化に浸ることができた一日だったと思う。金閣寺や清水寺など人気の名所には行かなかったが、みんな満足のうちに神戸に戻った。

四日目は、本校の元教員で、東日本大震災の後、職を辞して福島に移住し、被災した福島の高校生の学習をサポートするNPOを立ち上げた前川氏に講演を依頼した。彼が本校の高校三年生だった一月に阪神大震災が起こり、大学受験直前で動揺していた時、担任教員の「こういう時こそ腰を落ちつけて勉強せねばならない」という一言で前を向くことができ、現役で東大に合格できた。同じことを今度は自分が福島の若者に伝えるために今の道を選んだという話は参加者の心を掴んだようである。その後、福島の農水産物に対する風評被害についても訴えた。それに続くグループ・ワークでは、海外にいて感じる被災地のことと今回聞いた実状とのギャップについて率直に語る者もいた。やがて議論は原発の是非にまで及んだ。重いテーマであったがみんな真剣に話し合っただけで、前川氏も最後までその議論の輪の中に加わってくれていた。

五日目は、文科大臣補佐官の鈴木寛氏を迎え、未来の社会と自然の関係について考える場となった。「物質文明終焉後のリーダーシップ」を今の若者たちがどのように担っていくかという難しい話題だったが、質疑応答や熱心な議論が三

時間を超えて続いた。

そして最終日、残り五校が用意してきたプレゼンが披露された後、いよいよ総まとめとしてみんなでアコードを作成することとなった。二十人の参加者を四つのグループに分け、各グループがテーマごとに纏め、それぞれのグループの代表がその纏めを持ち寄って集約するという手順で、午後一杯を使う真剣な取り組みであった。

みんなで宿泊していたホテルの一室でのフェアウェル・パーティの席上、生徒の代表がそのアコードを読み上げて、すべてのプログラムが終了した。以下はそのアコードの結論部分である。

NWIS Accord Conclusion

It is clear that many parties are responsible for environmental degradation and must work in tandem to resolve the issues regarding our relationship between society and the natural world.

All stockholders must ensure a balance between economic actualization and the ecosystem by holding each other accountable.

We believe the individual has the responsibility to guarantee this cooperation occurs.

By following the aforementioned steps and actions, we can break down the barriers and obstacles that restrict humanity from achieving environmental harmony.

当番校としては、生徒・付添教員三十人の一週間の宿泊施設と三食の用意が一番の心配であった。国によっては牛肉や豚肉を食べられない人もいたし、ベジタリアンもいた。しかし神戸は国際都市であるし、近年はインバウンドで賑わっている。宿泊をお願いしたホテルは適切に対応してくれた。京都での松華堂弁当もベジタリアン対応ができた。期間中、軽い風邪の症状や疲れを訴えた参加者はいたが、大きな事故やトラブルもなく、みな元気に帰途についた。当番校としての務めは何とか果たせたとほっとしている。来年度はインドのムンバイの学校で行われる。都合が合えば視察に出向こうと思っている。